

# 春分儀式

I O S 儀式魔術文書 VE97

- |       |                   |
|-------|-------------------|
| 第 1 章 | 解 説               |
| 1     | 司官の配置             |
| 2     | 儀式場の準備            |
| 第 2 章 | 神殿聖別儀式            |
|       | L B R P / L B R H |
|       | 浄化 / 聖別           |
|       | 神の姿形の設定           |
|       | 四門の開放 / 四壁の設定     |
|       | 竜の周行              |
|       | 四聖獣の宣言            |
|       | 聖なる象徴の開示          |
|       | 神殿設定の宣言 / T M の設定 |
|       | 上位神殿との接合          |
| 第 3 章 | 春分の祝祭             |
|       | 諸神の召喚             |
|       | パスワード交換           |
|       | ヘルメスの旅            |
|       | 聖 餐               |
|       | 宇宙の主の讃歌           |
| 第 4 章 | 神殿の閉鎖             |
|       | 浄化 / 聖別           |
|       | 諸神への賛辞            |
|       | 竜の逆周行             |
|       | 四壁の開放 / 四門の閉鎖     |
|       | 四方位の閉鎖            |
|       | 大地への祈り            |
|       | L B R P / L B R H |

THE OFFICIAL ORGAN  
OF  
I O S

PUBLICATION IN CLASS D  
IMPRIMATUR : M FRATER I O S

THE SPRING EQUINOX CEREMONY FOR GROUP WORKING  
I O S RITUAL MAGIC WORKING

## 第1章 解 説

本儀式は、小規模な団内グループ(ロッジ単位程度)が比較的簡易な準備で行えることを前提に作成した。従って、《黄金の夜明け》団などで執拗なまでに追求された儀式のシンメトリーや細部の精密さに欠ける部分があるかもしれない。しかし、本儀式においては、豊潤な虚飾より実践的簡潔さを、正確で冗長な記述より、瞬間の真実と実効性を追求した。

《春秋分点》は、「均衡と調和」を表象する宇宙的な時刻である。年に2回の分点において、太陽の運行または振動と地上の四大元素が融合する。本儀式は春分点の前後48時間以内に実施すること。本儀式では、立体天球の北極を取り巻く《大いなる竜》の力を召喚する。従って儀式の最初と最後にハイエロファントは、自己の責任で小五芒星及び小六芒星の追儼儀式を行わねばならない。

なお、本儀式は魔術神殿として使用する場所に、アストラル神殿を降下させる儀式と春分の祝祭の2部で構成されている。

### 1 司官の配置

本儀式に必要な最低の人数は2人である。極論すれば、ハイエロファントとハイエリースがいれば儀式は実行できる。しかし、円滑な儀式の執行を考慮した場合は、それ以上の司官が必要となる。四方位の守護者をヘゲモンらが兼た場合は6~8名、完全な儀式を行う場合は、14名必要である。

最も大切なのは、ハイエロファント(ハイエロファントリア)、ハイエレイア(ハイエリース)及びヘゲモン(ヘゲモーネ)の選定である。

次に述べるのは、《神殿聖別儀式》の司官に充当する人物の理想像である。作業を主催する仲間の数が少ない場合は、性格の適合どころか、男女の別さえ該当する司官を集められない場合があるだろう。そのときは適宜、最良の選択をするように心がけなさい。また、司官は固定せずに半年かそこらで配置換えをするのが望ましい。この配置換えを定期的に行って、ハイエロファント、ハイエレイア、ヘゲモンの配置が、数年たてば訓練を受けた全員に回るよう配慮する必要がある。

可能ならば、法衣を纏う。通常は、位階の指定色、《黄金の夜明け》では第1回は黒、第2回は白であるが、特殊な神殿を用いる場合はこの限りではない。

#### 《ハイエロファント = 渦 = ホルス神》

男性が望ましいと言われるが、次の条件を満たせば男女どちらでも良い。かれは作業の場における人間及び非・人間双方の霊的要素を制する能力が要求される。それ故に活動的で大胆な性格が要求される。一例として言えば、肉体的に強壯で外向的な人間が相応しいだろう。この司官は儀式の指導的役割を果たし、動き回り、少しも憶することなく指示を出さねばならない。

#### 《ハイエレイア = 水・闇 = イシス女神》

基本的に女性である。四大の水と、太陽の沈む西を表象するハイエレイアは、豊かな大洋のごとき豊饒さと、荒れ狂う嵐の海の猛々しさを併せ持つ複雑な人格が望ましい。体内の奥深くに闇を宿すが、やがてそれは再生の光に変容する。

#### 《ヘゲモン = 風・光 = オシリス神》

基本的に男性である。四大の風と、太陽の昇る東を表彰するヘゲモンは、颯爽と動く活動かであり、若々しく復活後の不死のオシリスを表象している。

#### 《ケルックス = 東のアヌビス神》

かれは神々の伝令として、門の前と後に控える。かれは両界の遊歩者にして、観察者であり、ときには審判者でもある。

#### 《ストリストリア = 地 = ネフシス女神》

女性が望ましい。四大の地と、タットワの《計画と破壊の潮》を表象するストリストリアは、不動の大地の安定さと、潜在的な再生力を体現する存在である。

#### 《ダドウコス = 火 = セト神》

男性が望ましい。四大の火と、タットワの《撒種と収穫の潮》を表象するダドウコスは、全てを焼き尽くし滅ぼす火のなかの活動力と、神秘性を体現する存在である。

#### 《センチネル = 西のアヌビス神》

かれは強い意志をもって作業場の入り口を護る。その原型は、エデンの入り口を警護する

燃える剣をもつケルビムである。

《東の聖獣の守護者 = ラー神》

東は「調和と癒しの門」である。この性質を体現した人物を当てるべきだ。バランスの取れた人格をもち、他人の痛みに敏感な者が良い。可視の場は、夜明けの太陽ラー神を背負うので、洗刺とした清々しい人物像も求められる。

《南の聖獣の守護者 = アハトゥール神》

南は「愛と勇気の門」である。この性質を体現した人物を当てるべきだ。理想的には、無鉄砲さとは無縁な寡黙なタイプの勇気を持ち、人種や国籍、信条に偏見を覚えない静かに溢れ出すような愛を持つ人物が良い。火の蛇をうちに宿した人物を探すこと。可視の場は、真昼の太陽アハトゥール神である。

《西の聖獣の守護者 = トゥーム神》

西は「力の門」及び直観的な「内的知識」への扉である。同時に四大のうち水の間でもあるので、月の力を引き寄せる女性が相応しい。彼女は感受性が強く、想像力に溢れ、視覚化に秀でた人物であるべきだが、支配欲の強い人物は相応しくない。可視の場は、日没の太陽トゥーム神であり、豪華な残光をたなびかせている。

《北の聖獣の守護者 = ケペラ神》

北は大自然と惑星の諸力について、強い共感を覚える人物がなるべきだ。年経るごとに死と復活を体現し、忍耐強い人物を選ぶ。可視の場は真夜中の太陽ケペラ神であり、地底の不可視の軌道においてなお力強く躍動している。

《儀典司官 = トート神》

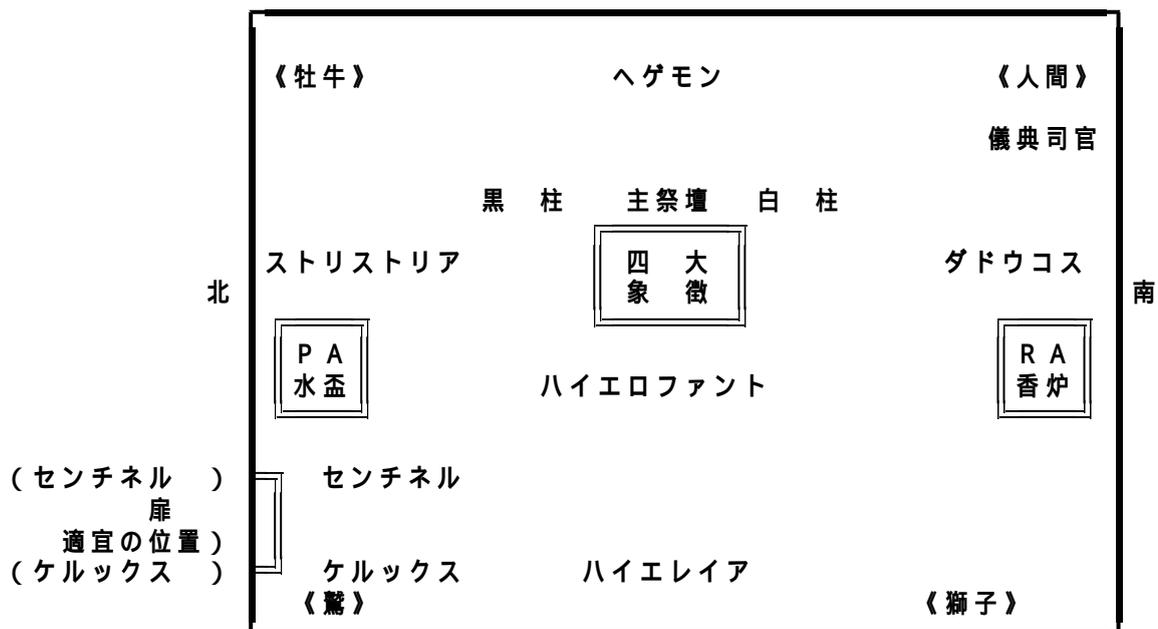
儀式文書を携え、儀式の節目に発言し、不測の事態に当たっては司官及び参加者を誘導する。その役目は儀典官 (Protocolor)、後見人 (Prompter)、先唱者 (Precentor) とも呼ばれるが、正式には儀典司官 (PROTOMYSTA) である。

2 儀式場の準備

完全な形の神殿を準備することは不可能である。地上の神殿は、アストラル神殿を誘引するための道具立てなので、要点を押さえる形で器材を配置する。次に述べるのは、魔術の神殿において通常配置される主要な器材であるが、総てを揃える必要はない。グループで準備できる範囲で、儀式の場所に適合した器材を準備すれば良い。それが無理な場合は、ただの部屋を何の粉飾もせずを用いる場合もある。

《神殿の配置》

東



西

神殿の床：マルクト 黒の柱：ホド 東の壁：門  
柱の西側：イエソド 白の柱：ネツァク 西の壁：クリボト

#### 《祭壇》

理想的には、二重立法祭壇を準備する。《黄金の夜明け》式の黒、セフィロト配色、その他の神殿固有の色調等を用いる。しかし、公共施設を借りるときに自前の祭壇を持ち込むのは困難かもしれない。そのときは普通の机に祭壇覆い（オルター・クロス）をかけて代用する。祭壇は部屋の中央に据える。本儀式においては、南と西に補助祭壇を設けて、石と香炉に水杯（ゴブレット）を置く。

#### 《柱》

ヤキンとボアズの二柱を準備する。できない場合は、想像力で補う。神殿の正面を東とし、東の壁のさらに彼方に、右に白く輝く象牙の柱、右に黒光りする黒檀の柱を視覚化する。

#### 《椅子》

四方位の壁の中央に椅子を置き、司官の座とする。部屋の構造が四方位と対応していないときは、儀式的な東方の壁を最初に定めて、そこから東西南北を規定する。四角形ではない部屋を用いる場合は、適宜その構造に応じて配置する。

守護者の椅子を南東 - 人間、南西 - 獅子、北西 - 鷲、北東 - 牡牛として配置する。

その他の参加者の椅子は四方位に均等になるように配置する。

#### 《四大旗》

該当する方位の壁に下げる。『エゼキエル書』に現れるケルビムを表象する旗、絵画、彫像、或いは記号を表示すれば良い。準備できなかった場合は、参加者全員が鮮やかに視覚化できるように言葉で誘導する。

#### 《小物》

四大を象徴する魔術用具、東 - 剣、南 - 杖、西 - 杯、北 - 塩の皿、等に加え、鈴、キャンドル、香炉や各種魔術武器等を可能な限り準備する。これも代用品を探すことは可能である。

## 第2章 神殿聖別儀式

### 1 神殿の設定

参加者は別室で法衣を着用する。(状況により平服で行う場合は、なるべく黒または白系統の模様のないシンプルな服装を用意する。長袖、長パンツ、ロングスカート等のなるべく肉体を覆い隠すものが良い。しかし、奇をてらってはいけない。)

法衣の着用が終了したら、沈黙し儀式の背後にある意味を黙想しつつ待つ。

ハイエロファント(H t)が最初に入場し、次の準備を行う。

#### 小五芒星の追儼儀式

祭壇の西に東を面して立ち、カバラ十字を切る。

「Tu es Regnum et Potentia et Gloria in saecula saeculorum, Amen」

東に行き地の追儼の五芒星を描く。

「Per Adonai Jehova Ex Oriente Lucem Orbis」

南に行き地の追儼の五芒星を描く。

「Per Adonai Sabaoth Ad Majorem Dei Gloriam」

西に行き地の追儼の五芒星を描く。

「Per Adonai Elohim In Hoc Signo Vinces」

北に行き地の追儼の五芒星を描く。

「Per Agla Methon Omnia Cum Sancto Sanctorum」

東に行き円を完成させ、右回りで祭壇の西に戻り、東に面する。

両手を左右に広げ、大天使を活性化させる。

「Prae Raphael, pone Gabriel, ad pares Michael, a sinistra Auriel  
Cenventus Sylvorum, Verbum Pythonicum, Mysterium Salamandrae,  
Antra Gnomorum」

「Accendat Pentagram circum, splendere Hexagram in columna」

カバラ十字を切る。

「Tu es Regnum et Potentia et Gloria in saecula saeculorum, Amen」

#### 小六芒星の追儼儀式

中央でL V Xのサインを行う。

東に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「PATER ET MATER UNUS DEUS ARARITA」

南に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「MATER ET FILIUS UNUS DEUS ARARITA」

西に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「FILIUS ET FILIA UNUS DEUS ARARITA」

北に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「FILIA ET PATER UNUS DEUS ARARITA」

中央に戻り、薔薇十字を描く。

「ARARITA ARARITA ARARITA」

トライデントのサイン、引き続き両手を王冠に添え、大地に落とす。

「OMINA IN DUOS DUO IN UNUS UNUS IN NIHIL :

HAEC NEC QUATUOR NEC OMNIA NEC DUO NEC UNUS NEC NIHIL SUNT.」

「GLORIA PATRI ET MATRI ET FILIO ET FILIAE ET SPIRITUI SANCTO EXTERNO ET  
SPIRITUI SANCTO INTERNO UT ERAT EST ERIT IN SAECULA SAECULORUM  
SEX IN UNO PER NOMEN SEPTEM IN UNO ARARITA.」

L V Xサインを行う。

東の玉座に座り、呼吸と中央の柱で魔法鏡を活性化したのち、神殿の境界までオーラを拡張し、神殿を黄金の光で満たす。

これらが完全に成し遂げられたら、合図の鈴(銅鑼)を鳴らす。

センチネル(フラックス)とケルックス(ケルカイーナ)は、扉の外側で神殿を守護している。H tの鈴の合図の鈴(銅鑼)で入室を開始する。最初にケルックス(K x)が入室して右側に立ち、続いてセンチネル(S e)が入室して左側に立つ。他の司官及び参加者は、この二人の間をくぐり、儀典司官(P t)、ハイレイア(H r)、ヘゲモン(H g)、ダドウコス(D d)、ストリストリア(S t)、東の守護者(E G)、南の守護者(S G)、西の守護者(W G)、北の守護者(N G)、その他の参加者(東南西北側)の順で入室する。

それぞれは入室する際にセンチネルに剣を突きつけられ、ケルックスの耳にロッジのパスワードを囁かねばならない。ケルックスは正しいパスワードを聞いたなら頷いて、先に行か

せる。センチネルは参加者の人数を確認する。

H t : 「ケルックスよ、全ての者が正しいパスワードで応じたか。」

K x : 「全てパスワードを告げし者なり。神殿の首領よ。」

H t : 「センチネルよ、参集すべき者は集まりしか。」

S e : 「呼集されし者すべて集いたり。神殿の首領よ。」

祭壇の西に立ち東を向いて言う。

H t : 「ヘカス ヘカス エステ ベペロイ I O S - - - ロッジの兄弟姉妹たちよ。  
この作業の場に、上位の神殿への接点となる地上の神殿を建立せんがため、われらは  
集いたり。ロッジの神殿を開設するため兄弟姉妹の力と形を結集せん。」

P t : 「水と火の浄化」

H t : 「ストリストリアよ、神殿を水で浄化せよ。」

S t は、補助祭壇のゴブレットを取り上げ、東から始めて南、西、北と神殿の四方にゴブレットの塩水を滴らせる。そのやり方は最初、右手の三本の指を浸し、壁に向かい3回振った後に、その場で右回りに回転し祭壇の方に3回振る。指を動かす軌跡が、それぞれ三角形を構成するように行う。北でこの動作を終了した後、東を通過して反転し自分の座に戻り、ゴブレットを戻した後に、宣言する。

S t : 「神殿を水で浄化した。」

H t : 「ダドウコスよ、神殿を火で聖別せよ。」

D d は、補助祭壇の香炉を取り上げ、東から始めて南、西、北と神殿の四方を香炉で薫蒸する。そのやり方は最初、壁に向かい3回振り込んだ後に、その場で右回りに回転し祭壇の方に3回振り込む。香炉を動かす軌跡が、それぞれ三角形を構成するように行う。北でこの動作を終了した後、東を通過して自分の座に戻り、香炉を戻した後に、宣言する。

D d : 「神殿を火で聖別した。」

H t : 「場をもちたる者は、その姿形を纏うべし。」

H t は顔のないアケファロスの姿形をまとう。各司官は自分の《可視の場》に相応するエジプト神の姿形を纏う準備を行う。すなわち背後に視覚化した神の巨大な像を維持する。

各方位の守護者は、対応するケルプの神聖獣の姿形を纏う。各司官の姿形を確認した後、H t はその姿形を空間に焼き付ける。

H t は祭壇の方を向いて、《ヴェールを開く》合図を行う。その後、祭壇の剣を取上げ、東に面する。

H t は東に行き、座したH gの前に立ち、剣を垂直に捧げ持ちながら、その柄を額に当て、神聖名「I H V H」を振動させる。同時に白輝光を天空から引き寄せ、自らのケテルを通してティファレットに引き入れる。

H t は剣の柄を胸の位置に移し、神名「A S R」を白い火文字でティファレットの上に刻印する。そののち、「A S R」を三回振動させる。一回目は自分のなかで、二回目は剣の刃を倒し、H gの胸に当てながら自分とH gの内部で、三回目はH gのなかだけで振動させる。

H t は「Communicantes」と唱えながら自分のティファレットにA S Rの薔薇十字のシギルを形成し、「et Diem Sacratissimum」と唱えながらH gのティファレットに投射し、H gの背後の神の像を強く引き寄せ、「Celebrantes Forma Diem」と唱えながらオシリスの神の姿形をH gに重ね合わせる。

これらの手順は、H tとH gの共同作業である。  
H gはH tの誘導に従い、一連の伝達を強く視覚化しなさい。両者を結ぶエーテル的なリンクを通じて、H tの魔術的意志が流れ込み、H gの魔術的意志と融合し、強固な姿形を創造するように努力せよ。

同じ形成を、次の順序で行う。

D d : 「 A D N I 」  
「 S h I T h 」

H r : 「 A H I H 」  
「 A S T h 」

S t : 「 A G L A 」  
「 N B T 」

K x、S e、P t及び四方位の守護者たちは、その間に自力で神の姿形を纏う。

P t : 「<sup>しもん</sup>四門の開放と<sup>しへき</sup>四壁の設定。  
参列者は祭壇を向いてお座り下さい。」

全員が祭壇の方を向く。H tは、H gに命ずる。

H t : 「ヘゲモンよ、風の門を開き、神殿の東壁を設定せよ。」

H gは力の剣をもち、北東に行き、神殿の東の壁沿いにそれを水平に走らす。東側に座る参加者の前を横切るときは、剣で肩に触れていく。ただし、《牡牛》と《人間》の守護者に触れてはならない。再び、東の中央に戻り、エノク語とヘブル語の名前を振動させながら、剣で、それぞれの五芒星とサインを描く。

H g : 「 E X A R P 」 「 A H I H 」  
霊の均衡能動の召喚の五芒星を描き霊のサインを入れる。

H g : 「 O R O I B A H A O Z P I 」 「 I H V H 」  
風の召喚の五芒星を描き、中央に宝瓶宮のサインを入れる。

H gは祭壇に向き直り、H tに告げた後、剣を額に押し当てる。

H g : 「風の門を開き、神殿の東壁を設定した。」

H tは、H gの返事を確認した後、D dに命ずる。

H t : 「かくあれかし。ダドウコスよ、火の門を開き、神殿の南壁を設定せよ。」

D dは祭壇から杖(剣)を取り、南東に行き、神殿の南の壁沿いにそれを水平に走らす。南側に座る参加者の前を横切るときは、杖(剣)でその肩に軽く触れる。ただし、《人間》と《獅子》の守護者に触れてはならない。再び、南の中央に戻り、エノク語とヘブル語の名前を振動させながら、杖(剣)で、それぞれの五芒星とサインを描く。

D d : 「 B I T O M 」 「 A H I H 」  
霊の均衡能動の召喚の五芒星を描き霊のサインを入れる。

D d : 「 O I P T E A A P E D O C E 」 「 A L H I M 」  
火の召喚の五芒星を描き、中央に獅子宮のサインを入れる。

D dは祭壇の西に戻りH tに告げた後、杖(剣)を額に押し当て祭壇に戻す。

D d : 「火の門を開き、神殿の南壁を設定した。」

H tは、D dの返事を確認した後、H rに命ずる。

H t : 「かくあれかし。ハイエレリアよ、水の門を開き、神殿の西壁を設定せよ。」

H r は祭壇から盃を取り、南西に行き、神殿の西の壁沿いにそれを水平に走らす。西側に座る参加者の前を横切るときは、盃に右手の指を浸し、額に液体をつける。ただし、《獅子》と《鷲》の守護者に触れてはならない。再び、西の中央に戻り、エノク語とヘブル語の名前を振動させながら、盃でそれぞれの五芒星とサインを描く。

H r : 「 H C O M A 」 「 A G L A 」  
 霊の均衡受動の召喚の五芒星を描き霊のサインを入れる。  
 H r : 「 E M P E H A R S E L G A I O L 」 「 A L 」  
 水の召喚の五芒星を描き、中央に天蠟宮のサインを入れる。

H r は祭壇の西に戻り H t に告げた後、盃からひとくち飲み祭壇に戻す。  
 H r : 「水の門を開き、神殿の西壁を設定した。」

H t は、H r の返事を確認した後、S t に命ずる。  
 H t : 「かくあれかし。ストリストリアよ、地の門を開き、神殿の北壁を設定せよ。」

S t は塩皿をもち、北西に行き、神殿の北の壁沿いにそれを水平に走らす。北側に座る参加者の前を横切るときは、皿の塩をひとつまみ額に降りかける。ただし、《鷲》と《牡牛》の守護者に触れてはならない。再び、北の中央に戻り、エノク語とヘブル語の名前を振動させながら、皿で、それぞれの五芒星とサインを描く。

S t : 「 N A N T A 」 「 A G L A 」  
 霊の均衡受動の召喚の五芒星を描き霊のサインを入れる。

S t : 「 E M O R D I A L H E C T E G A 」 「 A D N I 」  
 地の召喚の五芒星を描き、中央に金牛宮のサインを入れる。

S t は祭壇の西に戻り H t に告げた後、皿の塩をひとつまみ口に入れ祭壇に戻す。  
 S t : 「地の門を開き、神殿の北壁を設定した。」

H t は、S t の返事を確認する。  
 H t : 「かくあれかし」

H t : 「四門は開放された。神秘なる周行を光と闇の小径に起こすべし。」

P t : 「竜の周行。  
 この神秘なる《竜の周行》により、上空から光の渦が、下方から闇の渦が召喚され、祭壇を縦軸として、神殿全体を光と闇の二重螺旋のなかに包み込む。」

H g が最初に右回りに動き始める。D d、H r、S t が追う。  
 神殿の東を通過するとき《ホルスのサイン》を円周上になし、H g は1回、D d は2回、H r とS t は3回通過した後、自分の場に戻る。

H t : 「神秘なる周行は完成し、天の竜は降下せり。」

P t : 「四聖獣の宣言」

H t : 「われは四聖獣の守護者を呼ばん」

E G : 「われは《人間》の象徴をまといたり。<sup>アケリアン・エイジ</sup>宝瓶宮の時代において、それは時の始まりから継承されし、友邦団を表象せり。人の子とその造り主の絆を結ばんがために、祭壇にこれを捧げん。」  
 E G は進み出て、《人間》のタリズマンを置く。

H g : 「かくあれかし」

S G : 「われは《獅子》の象徴をまといたり。愛と勇気の与え手なり。心臓に隠されし、真実の意味を知らしめるために、祭壇にこれを捧げん。」  
 S G は進み出て、《獅子》のタリズマンを置く。

D d : 「かくあれかし」

W G : 「われは《鷲》の象徴をまといたり。人の子に言葉を授けし者なり。太陽の目をもつ者よ、透明なる水晶の視野を与えるため、祭壇にこれを捧げん。」  
W G は進み出て、《鷲》のタリズマンを置く。

H r : 「かくあれかし」

N G : 「われは《牡牛》の象徴をまといたり。力と忍耐の授け手なり。人の子のくびきの下に  
ある地上のすべての獣に代わり、慈悲の心を与えるため、祭壇にこれを捧げん。」  
N G は進み出て、《牡牛》のタリズマンを置く。

S t : 「かくあれかし」

P t : 「聖なる象徴の開示」

H t は祭壇の西から H g に語りかける。  
H t : 「ヘゲモンよ、汝はこの神殿で特別な役を担いたり。その役割を明かしたまえ。」

H g : 「われの座は、東方より来る光を象徴する座なり。そは《黄金の夜明け》の輝きであり、  
われらの暗き意識を導く光明なり。この光なしには、大いなる仕事は始まらざる。  
しからば、神殿におけるわが役割は、光の座を守護し、秩序と調和をもたらすものなり。」

H t : 「汝の支えたる門の彼方の光に敬礼せん。」  
H t は祭壇の西から東方に片膝をついて跪拝する。

H t は祭壇の北に廻り、D d に語りかける。  
H t : 「ダドウコスよ、汝のもちたる聖なる象徴を解き明かしたまえ。」

D d は補助祭壇から小さな切石を持ち上げ、言う。  
D d : 「われがもちたるものは、R A 、粗き切石なり。  
われらの今を表す、《不完全なる人間》の象徴である。」

H t : 「われらが見て、その意味を心に刻めるよう、象徴を祭壇に置きたまえ。」  
D d は象徴の石を中央の祭壇に置き、戻る。

H t は祭壇の東に回り、H r に語りかける。  
H t : 「ハイエレリアよ、汝はこの神殿で特別な役を担いたり。その役割を明かしたまえ。」

H g : 「われの座は、西方の地平線に潜む闇を象徴する座なり。そは冥き沈黙の輝きであり、  
神秘を覆い隠すヴェールなり。この闇の保護なしには、世界は巨大なる神秘の炎によ  
り破壊され、大いなる仕事は未完のまま挫折せん。しからば、神殿におけるわが役割  
は、闇の座を守護し、混沌と忘却を手懐けるものなり。」

H t : 「汝の支えたる門の彼方の闇に敬礼せん。」  
H t は祭壇の東から西方に片膝をついて跪拝する。

H t は祭壇の南に廻り、S t に語りかける。  
H t : 「ストリストリアよ、汝のもちたる聖なる象徴を解き明かしたまえ。」

S t は補助祭壇から小さな切石を持ち上げ、言う。  
S t : 「われがもちたるものは、P A 、完全な切石なり。  
われらがいずれ到達すべき、《完全なる人間》の象徴である。」

S t : 「われらが見て、その意味を心に刻めるよう、象徴を祭壇に置きたまえ。」  
S t は象徴の石を中央の祭壇に置き、戻る。

H t は祭壇の西に行き、東を向いて立つ。  
H t : 「われは宣言する。I O S - - - ロッジの神殿は設定された。」

P t : 「地上の神殿は設定された。これより上位神殿との接合が実施される。」

H t : 「この儀式の目的は、光と闇の神殿を建立することにある。今やその地上部分は設定され、聖別された。残る内的神殿の設定を行う必要がある。われらを取り囲むアストラル神殿を視覚化せん。目を閉じ、わが言葉に従いて、強く視覚化されよ。われらの周りに、石を刻んだ巨大な柱の列が現れ、このロτζを円形に取り囲む。その柱は丸屋根を支え、フレスコ画とモザイク模様で飾られた天井が見える。天井から吊るされた青銅のランプから柔らかな光が漏れ、繊細な石の細工が伺える。われらの足の下には、白と黒の大理石の敷石が、市松模様の床として広がっている。その中央には、白い大理石の立方体がふたつ重ねて祭壇となり、黄金の祭壇覆いがかけてある。これは《贖いの祭壇》である。祭壇の上には、輝ける聖盃が白絹の覆いをかけて置かれている。」

H g : 「東には、高い槽の上に玉座が置かれている。これは《栄光の玉座》なり。玉座の背後には、黄金色、薔薇色、琥珀色のガラスで組まれた窓があり、大天使ラファエルが立っている。ラファエルは、太陽の黄金の光を纏い、手に星の光を携えている。ここは、《調和と癒し》の場なり。」

H r : 「《栄光の玉座》の対極、西側には、小さな玉座があり、玉座の背板には鷲の姿が刻んである。玉座の背後には、青色、緑色、トルコ石色のガラスで組まれた窓が開いている。これは《明瞭な霊視》の座であり、大天使ガブリエルが控える。かれは内観と自我に対する知識をもたらす。」

D d : 「南側には、獅子の姿を刻んだ小さな玉座があり、赤色と黄金色のガラスで組まれた窓がある。軍団の長、大天使ミカエルがこの場に控え、《愛と勇気》をもたらす。」

S t : 「北側には、牡牛の姿を刻んだ小さな玉座があり、黒枠に小豆色、オリーブ色、黄色のガラスで組まれた窓がある。大天使ウリエルがこの場に控え、《忍耐と持久》をもたらす。」

H t : 「これらの大天使は、主の僕にして、それぞれの方位の徳目とわれらを仲介する者なり。今、かれらは《贖いの祭壇》に集い、自らを主に捧げたり。われらも《地上の祭壇》に集い、かれらのひそみにならわん。」

全員が祭壇を取り囲む。

H t : 「腕を組み、手と手を取りて、われらのオーラをひとつに融け合わせよう。無敵なる主の顕現にあずかりて、われらの靈魂をひとつとなし、聖盃に注ぎ込まん。そをもちて、この神殿は栄光の場とならん。」

全員が手を組み人間の輪のなかに祭壇を包み込む。手を放すことなく次を唱える。

A M : 「主よ。われらは自らを捧げん。わが心臓と靈魂は、汝への絶ゆることなき供物とならん。汝が御手の技の裔を受け、汝の意志のままに与え、奪いたまえ。アーメン。」

A M : 「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！  
聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！  
聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！  
光と闇の主よ。」

全員が手を放し、元の座に戻る。

### 第3章 春分の祝祭

H t : 「われら春分点を祝祭せん。」

P t : 「諸神の召喚」

H t は東に面する。

H t : 「ここに《生まれなき》者を召喚せん」

H t : 「われ汝を召喚す、アケファロスよ。  
汝、地と天を造りし者よ。  
汝、昼と夜を造りし者よ。  
汝、闇と光を造りし者よ。  
汝は、R A - H R V - K T H I、完全者たるわれなり、何人もかって目にせぬ者なり。  
汝は、イア ベズ ペー。  
汝は、イア アボフラッツ ヨド。  
汝は、正と不正を分かちたる。  
汝は、女と男を造りたる。  
汝は、種と果実を生みたる。  
汝は、人を互いに愛しあい、憎みあうべく造りたる。」

H t : 「われはB G D。汝の密儀、すなわち光と闇の魔術を託されし、汝の予言者なり。  
汝、湿と乾をあらわし、すべての生命を造り、育み、滅ぼすものなり。  
汝、わが声を聞くべし。われは、無垢なる蒼穹の天使なればなり。  
こは、汝の預言者につけられし名前なり。」

H g は東を向いて立ち、東の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なオシリス女神の立像を視覚化する。意識の焦点を女神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

H g : 「わが声を聞け、A S - A Rよ！  
汝、恐るべき不可視の神よ。  
汝、霊の虚の場所に住まう者よ。  
汝は、人の姿を取りし蛇なり。  
汝は、宇宙を調停する者なり。  
汝は、神殿の支配者なり。  
わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。  
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、  
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、  
われに服従せしめん。」

D d は南を向いて立ち、南の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なセト = テュフォーン神の立像を視覚化する。意識の焦点を神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

D d : 「わが声を聞け、A P V - P R S h！  
汝、恐るべき不可視の神よ。  
汝、霊の虚の場所に住まう者よ。  
汝は、否定する霊なり。  
汝は、真夜中の天空なり。  
汝は、苦き知恵の支配者なり。  
わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。  
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、  
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、  
われに服従せしめん。」

H r は西を向いて立ち、西の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なイシス女神の立像を視覚化する。意識の焦点を女神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

H r : 「わが声を聞け、A S T h - R N N V T h！  
汝、恐るべき不可視の神よ。  
汝、霊の虚の場所に住まう者よ。  
汝は、宇宙の母なり。  
汝は、全き闇なり。  
汝は、魔術の支配者なり。」

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。  
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、  
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、  
われに服従せしめん。」

S t は北を向いて立ち、北の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なネフシス神の立像を視覚化する。意識の焦点を神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

S t : 「わが声を聞け、N B T - H T I !  
汝、恐るべき不可視の神よ。  
汝、霊の虚の場所に住まう者よ。  
汝は、暗き闇を支配する新月の女神なり。  
汝は、遙かな高みを泳ぐ黒き頭蓋骨なり。  
汝は、真実をもたらず羽毛を携える者なり。  
わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。  
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、  
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、  
われに服従せしめん。」

H t は祭壇の西から東に面して両手を広げ祭壇に主神を召喚する。

H t : 「われ、汝を召喚す、生まれなき者よ！  
汝、恐るべき不可視の神よ。  
汝、霊の虚の場所に住まう者よ。  
汝は、V R - H R V、古き天帝なり。  
汝は、R A - H R V - K T H I、真昼の太陽なり。  
汝は、H R V - P A - K R A T h、無垢なる幼子なり。  
汝は、生まれなき者にして、宇宙の守護者なり。  
わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。  
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、  
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、  
われに服従せしめん。」

H g : 「これは神々の主なり。  
これは宇宙の主なり。  
これは風の恐れる者なり。  
これはその命により声を造りし、万物と無の支配者なり。」

H t : 「わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。  
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、  
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、  
われに服従せしめん。」

H r : 「われは汝のもとに行かず、汝がわがもとに来たれり。  
星と、夜と、稲妻の彩る空間に、  
汝がいずこをさまようとも、常にわがもとに帰り来たり。  
われは天の空虚に住まえり。  
汝がこの座所を訪れしとき、汝はまさに知る。  
炎と煙の柱をとおして、汝は上り、また下りぬ。  
不死鳥のごとく、翼は焼かれ、また蘇る。  
そは汝の真実の名なり。」

H t : 「われはかれなり、生まれなき者なり。足元に目をもつ者なり。  
強大にして不滅の火なり。  
われはかれなり、真実なり。  
われはかれなり、世界に悪のはびこるを厭う者なり。  
われはかれなり、稲妻を発し、雷鳴を轟かす。  
われはかれなり、地に生命の雨を降らしたり。  
われはかれなり、口より火を発する者なり。  
われはかれなり、子を造り、光へと顕現する者なり。  
われはかれなり、世界の恩寵なり。  
蛇をまといし心臓こそ、わが名前なり。」

汝、来たりてわれに従い、すべての霊をわれに服従せしめよ。  
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、  
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、  
われに服従せしめん。イアオ、サバオ。かくのごとき言葉なり。」

P t : 「内なる神殿に《三重に偉大なる神》は降臨せり。  
春分は到来せり、宇宙の主を讃えん。」

H g : 「宇宙の主を讃えん。  
聖なるかな、汝、風の主よ。  
蒼穹を創りしものよ、来たりて春分を祝せよ。」

D d : 「宇宙の主を讃えん。  
聖なるかな、汝、火の主よ。  
栄光の座を示すものよ、来たりて春分を祝せよ。」

H r : 「宇宙の主を讃えん。  
聖なるかな、汝、水の主よ。  
創造のとき深淵の面を歩きしものよ、来たりて春分を祝せよ。」

S t : 「宇宙の主を讃えん。  
聖なるかな、汝、地の主よ。  
自ら座すべき大地を造りしものよ、来たりて春分を祝せよ。」

H t : 「宇宙の主を讃えん。  
聖なるかな、汝、万物を生みしものよ。  
森羅万象は、汝のなかにあり、  
わが右手を天に伸ばせば、そこに汝あり、(右手を上)  
わが左手を冥府に伸ばせば、そこにも汝あり、(左手を下)  
わが腕を組めば、そこにも汝あり。(腕を組む)  
汝のものは、躍動する《風》なり。(東面)  
汝のものは、燃える炎の《火》なり。(南面)  
汝のものは、満ち引きする《水》なり。(西面)  
汝のものは、堪え忍び定まる《地》なり。(北面)  
わが心臓の光輪は回転せり、来たりて春分を祝せよ。」

S t : 「I I I I I I I I」 - - - H t : 「Ipsissimis Isis」  
D d : 「A A A A A A A A」 - - - H t : 「Ad Astra Apophem」  
H r : 「O O O O O O O O」 - - - H t : 「Omnes Omnium Osiridem」  
H g : 「I I I I I I I I A A A A A A A A O O O O O O O O」

P t : 「宇宙の主の賛歌は終了せり。聞け、神殿のうからよ。」

H t は祭壇の東に周り、西を向く。

H t : 「春分は来たれり。昼と夜は均衡せり。」

H t : 「深き闇に拝礼す。」ホルスのサイン

H r : 「犬狼星の輝きは去れり、数多の母なる神々は退き、大いなる子の時代が訪れん。」  
Conuertere anima mea in requiem tuam。」

H t : 「AVE FIRMAMENTUM TERRENUM PER TESSERAM MAGNA . . .」  
鈴を6回鳴らす。

H t : 「全き光に拝礼す。」ハーポクラテスのサイン

H g : 「墓所の柱は切り倒されぬ、生と死は等価ならん。  
Vita quidem nomen vita, opus autem mors est。」

H t : 「AVE FIRMAMENTUM COELESTEM PER TESSERAM MAGNA . . . 」  
鈴を6回鳴らす。

P t : 「パスワードは交換された。ハーポクラテスの世が始まらん。」

H t は祭壇から離れ、東に行く。  
それぞれの方位の壁に面したH r、S t、D dの三司官は佇立したまま、神殿を囲む魔法円を青白い炎の円環として視角化し、その魔法円に意識と意志を投射して、炎を激しく燃え盛らせ、神殿内部が完全な結界として存在するように強化せよ。(四大の門はそのまま)  
H gは、炎の魔法円の東端に「風の門」を強く視覚化し、そこから熱く湿った風のイメージが吹き込む様子を、意識と意志を総動員して誘導せよ。神殿の内部を軽快な風の霊気が渦を巻いて疾駆する有り様を感じなさい。

H t は東を向いて跪拝する。

H t : 「かそけき薄明の水平線より黄金の光が訪わん。」

P t : 「司官を除く参列者は東を向いて目を閉じて下さい。  
そして、身体力を抜き、ゆっくりと呼吸して下さい。東の方角に真暗な水平線をイメージします。見渡す限り島影も、沖の漁り火も見えず、ただひたすら凧の海面がゆったりと広がる大海原を強く想像して下さい。身体力を抜いて、イメージの世界に身をゆだねて下さい。  
ぼんやりとした黒い帯にしか見えない水平線の上には、雲ひとつない透明な夜空のスクリーンに数え切れないほどの星が輝いています。左の水平線から右の天頂付近まで、かすかな白い粉を蒔いたような光の帯が闇夜を横切っています。それはミルキーウェイともよばれる銀河、天の川です。

(しばしの沈黙 . . . )

あなたの左手の方角に意識を向けて下さい。左の濃い闇のなかには、北方の巨大な山脈に守られた聖なる頂があります。幾重にも折り重なる山々の背後に、ひととき高く聳える山の頂に、人間の存在しない神殿があります。地の霊に守られた神殿は、雪を頂く白い山肌の頂上付近にあり、凍結した岩盤に直接彫り込まれています。そこは北の門、ザホンと呼ばれる神々の集会場でした。神殿は古への神々の座でもあります。今は古き神々が訪れることもなく無住の神殿となった岩穴の大広間には、人間の背丈よりも高い黒い玄武岩の祭壇があり、白い骨のようなものが供えてあります。それは地の塩です。錬金術の3原理のうち、灰のなかには潜むもの、大地の不動の性質の根源、結晶する鉱物の種、神の不変の英知を表すものです。地の塩は濃い闇のなかで自ら光を発するごとく、白い宝石の粉のように輝いています。

(しばしの沈黙 . . . )

次にあなたの右手の方角に意識を向けて下さい。右の濃い闇のなかには、南方の広大な砂丘が広がっています。乾いた砂がゆっくりと動く砂丘のなかには、埋没した金属製の神殿があり、熱をもった純鉄の塔が砂の上に先端を見せています。古の神々が特別な目的のために建立した金属製の神殿は、もとより人間の訪れる場所ではなく、炎熱たるを糧とする火の霊が金属表面を磨き、神殿の床の塵を灼いています。眠りについて古き神々の来臨も絶えた空虚な神殿の塔の最上階には、生け贄の獣をまるごと焼けるような坩堝を模した祭壇があり、闇のなかで乾いた熱気とかすかな光を放っています。その上を覗き込めば、赤く燃える気体が激烈な炎の舌を放っているのが見えるでしょう。それは硫黄の精気、赤く燃える気体が激烈な炎の舌を放っているのが見えるでしょう。それは硫黄の精気、錬金術の3原理のうち最も苛烈な力です。全てを焼き尽くす炎であり、灼かれた素材でもある硫黄のゆらめく光は、永遠に創造し続ける神の真理を表しています。

(しばしの沈黙 . . . )

振り向くことなく背中の方角に意識を向けて下さい。あなたの背後には、測りしれぬ暗黒の深淵が広がり、あなたの背骨を冷やかな湿ったものが触れていきます。人間の限られた心において、背後の空間は神秘の潜む方角、いつかは訪れる死が佇む場所でもあります。後ろの凝集した闇のなかには、終わることのない水の面がひろがり、その底知れぬ深みには海龍の骨を組んだ神殿が海中を漂っています。無数の貝殻や海草で覆われて元の形さえさだかでない流線型の神殿は、水の娘達にかしずかれ海流に乗って無限の海をさまよっています。そのぬるぬるとした骨組みの中心には、ピンク色の珊瑚で床を敷き詰めた広間があり、巨大な二枚貝が天蓋つきの祭壇として据えられています。成長した種目鮫を一呑みにできそうな巨大な貝のなかには、かすかに動く生きた貝柱とやわらかな肉の舌がうごめいており、その重なり合った貝の肉布団の奥には真珠のかわりに銀色の重い液体が闇のなかで輝いています。ひとときも安定せ

ず、揺れ動く金属の液体は水銀の精髓、錬金術の3原理のうち、変化する物質の性質を示しています。それ故に、メルクリウスの霊は神の生命を表し、人間においては生命力の核であり、同時に荒々しい無意識の深みそのものでもあります。暗く冷たい深海の重みと、その膨大な水の塊の奥底で、変転する水銀の輝きを見つめて下さい。

(しばしの沈黙・・・)

再び意識を正面の海に戻して下さい。そして、海から吹く暖かい風を感じて下さい。それは、あなたの全身をやわらかく撫でていきます。全てを覆い隠す夜のやさしさを風のなかに感じて下さい。あなたの左、右、そして後ろには超越的な錬金術の3原理が、元素霊にかしずかれて存在しました。しかし、あなたの前にひろがるのは人間を拒絶しない自然の風景、暖かな夜のまどろみのなかに抱かれた海と空の調和の情景です。

そして、この目覚める直前の夢にも似たおぼろな光景にも変化が生じます。

あなたの心の目の前で、空と海を分ける水平線がはっきりと見えるようになってきます。夜空の星が瞬き始め、東の空が徐々に明るく、白み始めます。闇が勢いを失い灰色のモノトーンな世界に、そして幾重にも染め上げた版画のように、色が徐々に鮮明になり、灰色がかった黒から、群青色に、紺色から碧に、そして青から水色にと段々と変化していきます。今や夜の時刻が終わろうとしています。それと同時に東の水平線上に絹糸を流したような雲が幾筋もあらわれ、その一筋一筋の雲の下半分が白く浮き上がってきます。

もはや水平線は空と海の間を区切る明瞭な直線です。白々とした空の下に青みを帯びた暗い海の表面が細波を走らせて何かを期待するかのようになっています。風が光を運んできました。強い上空の風に追い立てられ、東の空から雲の帯が次々と流れてきます。

水平線が黒い筋から白い線に、そしてその中央がかすかな赤みを帯びてきました。赤い水平線はすぐに黄金色の輝きに変化していきます。水の上に現れた変化は空をも塗り替えます。東の雲の帯は下半分が黄金色に燃え上がり、上半分が灰色に織りあげられた2色の糸のようです。

ついに東の水平線は目映く燃え上がり、中央が膨らみ始めました。太陽の出現する直前の微妙な変化が、薄明の空を《黄金の夜明け》の放射状の光の矢で飾ります。太陽の出現する方角の海は赤と群青の斑の帯で染め上げられ、太陽の道をまっすぐにあなたの方に伸ばしてきます。風に煽られた海が波立ち、ざわめき始めます。

風がかすかな音楽を運んできました。聞いたこともないリズムで、人間の言葉とは違いますが歌声のようです。空と海が太陽神の光臨を喜んで、賛美歌を歌っているのです。そして目に見えない崇拝者の歌声に迎えられて、御来光が走りました。

世界が躍動します。爆発的な光が乱舞し、強烈な力の塊が黄金の光輪となって出現しました。一瞬にして、闇が拭い去られ、世界は水平線の上にゆっくりと姿を現した天の火の源の支配下におかれしました。太陽の熱と光があなたの全身を貫き、細胞のひとつひとつに至るまで揺り動かす、活性化します。光が肉体の暗く重い部分を溶かしていきます。あなたの肉体を満たす、純粋な喜びを味わいなさい。前方から降り注ぐ光は、やわらかな風と一体化してあなたの肉体に錬金術的な変化を与えていきます。今より夜は終わり、永遠の朝が始まります。

(しばしの沈黙・・・)

静かに目を開けて下さい。イメージの旅は終わりました。」

H t : 「ヘルメスの技は成就し、黄金がもたらされた。」

H t は説法を行う。

(春分点の意味：タットワの潮が、《破壊の潮》から《種蒔きの潮》に切り替わる。

黄金の夜明けの図版の意味：ゲブラーの真紅、ゲドゥラーの青、イエソドの紫の三角形

剣を持つ騎乗の戦神と笏を持つ王座の神、剣と笏を併せ持ちコクマーの棒となし、ピナーの杯で受けること。3原理と4元素の融和。等々・・・)

P t : 「春分点は通過せり。・・・聖餐をとものにせん。」

(注：特別な儀式を行う場合は、この部分で行う。繋ぎ方は以下のとおり。

P t の「春分点は通過せり。・・・をせんがため、・・・の儀式が執り行われる。」

・・・《儀式実施》・・・

P t の「・・・儀式は、終了せり、聖餐をとものにせん。」)

H t は祭壇の西に立ち、赤灯に手をかざす。

H t : 「ヨド NEQUAQVAM VACVVM」

H t は杯のワインを飲む。  
H t : 「ヘー LIVERTAS EVANGELII」

H t は薔薇を取り上げ香を嗅ぐ。  
H t : 「ヴァウ DEI GLORIA INTACTA」

H t はパンに塩をまぶして食う。  
H t : 「ヘー REGIS JUGUM」

H t は再度、薔薇を取り上げて言う。  
H t : 「ヘゲモンよ。われ汝を招く。  
われとともにこの薔薇の香を《風》の象徴として嗅ぐべし。」

H g は祭壇の東に立ち薔薇の香を嗅ぐ。次にH t はH g の手を取り赤灯に手をかざさせる。  
H t : 「われとともに、この神聖なる《火》の温かさを感じるべし。」

H t はパンを塩にまぶして与え、  
H t : 「われとともに《地》の象徴として、このパンと塩を食すべし」

H t は盃を取って与え、  
H t : 「されば最後に、元素の《水》の聖別されし紋章として、  
われとともにこの葡萄酒を飲むべし」

H g は退き、H t は祭壇の東に回り、南に面する。D d が進み出る。以後、同じプロセスでH r とS t に四大の象徴たる聖餐を与え、その後にK x、S e、そして四聖獣の守護者、参列者と進み、全員が聖餐を受け終わったら、P t が進み出て最後に食す。H t は祭壇の東から宣言する。

H t : 「われらが食せしものにより、われらに光と闇を分かち与えたまえ。  
宇宙の主を讃えん。」

A M : 「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！ (ホルスのサイン)  
聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！ (継続)  
聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！ (継続)  
光と闇の主よ！」 (ハーポクラテスのサイン)

#### 第4章 神殿の閉鎖

H t : 「ヘカス ヘカス エステ ベベロイ。I O S - - - ロッジの兄弟姉妹たちよ。  
ロッジの神殿を閉鎖するわれを助けよ。」

P t : 「水と火の浄化」

H t : 「ストリストリアよ、神殿を水で浄化せよ。」

S t が最初と同じ手順で浄化し、告げる。

S t : 「神殿を水で浄化した。」

H t : 「ダドウコスよ、神殿を火で聖別せよ。」

D d が最初と同じ手順で聖別し、告げる。

D d : 「神殿を火で聖別した。」

P t : 「諸神への賛辞」

H t : 「宇宙を領したまう《三重に偉大なる神》に感謝せん。  
輝ける鷲、R A - H R V - K T H I よ、時空の彼方に戻りたまえ。」

S t : 「均衡を領したまう《双子の女神》に感謝せん。  
大地の貴婦人、N B T - H T I よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。」

H r : 「魔術を制したまう《黒き女神》に感謝せん。  
海の貴婦人、A S T h - R N N V T h よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。」

D d : 「苦き知恵を制したまう《灼熱の試練を下す神》に感謝せん。  
虚空の領主、A P V - P R S h よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。」

H g : 「神殿を領したまう《死して再び蘇る神》に感謝せん。  
黄泉の領主、A S R - V N - N P R よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。」

H t : 「神秘なる逆周行を光と闇の小径に起こすべし。」

P t : 「竜の逆周行。  
この神秘なる《竜の逆周行》により、祭壇を軸として上下に絡み合った光と闇の二重螺旋が分離し、光の渦は上方に、闇の渦は下方に去って行く。」

H g が最初に左回りに動き始める。S t、H r、D d が追う。  
神殿の東を通過するとき《ホルスのサイン》を円周上になし、H g は1回、S t は2回、  
H r とD d は3回通過した後、自分の場に戻る。

H t : 「神秘なる逆周行は完成し、天の竜は上昇せり。されば《宇宙の主》を讃えん。」

A M : 「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！ (ホルスのサイン)  
聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！ (継続)  
聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！ (継続)  
光と闇の主よ！」 (ハーボクラテスのサイン)

P t : 「四門の閉鎖」

H t は、祭壇の南に廻りS t に命ずる。

H t : 「ストリストリアよ、神殿の北壁を解放し、地の門を閉じよ。」

S t は塩皿をもち、北東に行き、反時計廻りに神殿の北の壁沿いにそれを水平に走らす。  
再び、北の中央に戻り、皿でそれぞれの五芒星とサインを描く。

S t : 「N A N T A」「A G L A」

霊の均衡受動の追儼の五芒星を描き霊のサインを入れる。

S t : 「 E M O R D I A L H E C T E G A 」 「 A D N I 」  
地の追儼の五芒星を描き、中央に金牛宮のサインを入れる。

S t は祭壇の北に戻り H t に告げた後、皿の塩をひとつまみ口に入れ祭壇に戻す。

S t : 「 神殿の北壁を解放し、地の門を閉じた。 」

H t は、S t の返事を確認した後、祭壇の東に廻り H r に命ずる。

H t : 「 ハイエレイアよ、神殿の西壁を解放し、水の門を閉じよ。 」

H r は祭壇から盃を取り、北西に行き、反時計廻りに神殿の西の壁沿いにそれを水平に走らす。再び、西の中央に戻り、それぞれの五芒星とサインを描く。

H r : 「 H C O M A 」 「 A G L A 」  
霊の均衡受動の追儼の五芒星を描き霊のサインを入れる。

H r : 「 E M P E H A R S E L G A I O L 」 「 A L 」  
水の追儼の五芒星を描き、中央に天蠟宮のサインを入れる。

H r は祭壇の西に戻り H t に告げた後、盃からひとくち飲み祭壇に戻す。

H r : 「 神殿の西壁を解放し、水の門を閉じた。 」

H t は、H r の返事を確認した後、祭壇の北に廻り D d に命ずる。

H t : 「 ダドウコスよ、神殿の南壁を解放し、火の門を閉じよ。 」

D d は祭壇から杖（剣）を取り、南西に行き、反時計廻りに神殿の南の壁沿いにそれを水平に走らす。再び、南の中央に戻り、それぞれの五芒星とサインを描く。

D d : 「 B I T O M 」 「 A H I H 」  
霊の均衡能動の追儼の五芒星を描き霊のサインを入れる。

D d : 「 O I P T E A A P E D O C E 」 「 A L H I M 」  
火の追儼の五芒星を描き、中央に獅子宮のサインを入れる。

D d は祭壇の南に戻り H t に告げた後、杖（剣）を額に押し当て祭壇に戻す。

D d : 「 神殿の南壁を解放し、火の門を閉じた。 」

H t は、D d の返事を確認した後、祭壇の西に廻り H g に命ずる。

H t : 「 ヘゲモンよ、神殿の東壁を解放し、風の門を閉じよ。 」

H g は不死鳥の杖をもち、南東に行き、反時計廻りに神殿の東の壁沿いにそれを水平に走らす。再び、東の中央に戻り、剣でそれぞれの五芒星とサインを描く。

H g : 「 E X A R P 」 「 A H I H 」  
霊の均衡能動の追儼の五芒星を描き霊のサインを入れる。

H g : 「 O R O I B A H A O Z P I 」 「 I H V H 」  
風の追儼の五芒星を描き、中央に宝瓶宮のサインを入れる。

H g は祭壇の東に行き、H t に告げた後、剣を額に押し当てる。

H g : 「 神殿の東壁を解放し、風の門を閉じた。 」

P t : 「 大地への祈り 」

H t : 「 神殿を閉じる前に、われらより声小さき者たちに代わり、祈りを捧げん 」

S G : 「 主よ、われらの祈りを聞きたまえ。われらの友邦、汝の被造物、生命のために。  
とりわけ、様々な苦痛に苛まれるものたちのために。  
過労にて、食料不足にて、狩られて、生命失い苦しむものたちに。 」

捕獲され不当に扱われるものたちに。  
主よ、かれらのために、汝の慈愛の手を求めん。」

W G : 「主よ、われらの祈りを聞きたまえ。声なきものどものために。  
山々に、岩に、川の小石に、地下の石炭に、さまざまな鉱石の結晶に。  
かれらは沈黙のなかで微睡みたり。われらとは違うサイクルの生命を保持しながら、  
汝の御手に運ばれ、大地を形造れり。  
主よ、汝の僕として、かれらに耐える力を与えたまえ。」

N G : 「主よ、われらの祈りを聞きたまえ。大地の輝きと喜びに、感謝を捧げん。  
主の栄光はあまねく地上を満たし、われらに恵みをもたらしたり。  
主よ、地母神たる大地に愛と祝福を与えたまえ。」

E G : 「主よ、われらの祈りを聞きたまえ。汝の子たるわれらは、とりわけ祈らん。  
汝の愛をわれらの弟たち、エレメンタルと分かちつことを。  
かれらもまた汝の真実と光を仰ぎ見たり。  
汝の愛はあまねく、全ての生命の序列に分かち与えられる。  
かれらにも究極の贈り物を得る機会を与えたまえ、汝の生命の火花を、  
われらが不死の靈魂と呼ぶ分光を。」

A M : 「主よ、われらに祝福あれ。われらは絶えることなく汝を称えん。」

#### 《しばしの沈黙》

H t : 「この儀式に参集されし、すべての神々、大天使、天使、長老たち、  
この儀式に言及されし、すべての惑星霊、ダイモーン、四大の生き物たちよ。  
汝らの助力に感謝せん。平安のうちに元の場所に戻られよ。  
I H S h V H と I H V S h H の御名において、  
この儀式により拘束されし、すべての《霊》を解放せん。」

H t は祭壇に向き直る。全員が祭壇を向く。

H t : 「われは宣言する。地上の神殿は閉鎖せり。」

H t は《ヴェールを閉じる》サインを行う。

A M : 「地上の神殿は閉鎖せり。アーメン。」

P t : 「参加者退出」

H s が先頭に逆周行を開始する。H g、D d、S t、四聖獣の守護者、東の参加者、南の参加者、西の参加者、北の参加者の順でその後を追ひ、各自が3度周行したら、作業場を出る。最後に残ったH t は、小六芒星及び小五芒星の追儼儀式を行い、最後に退出する。

もし、神殿の魔術的磁気作用が残存しているようであれば、所要の大儀礼を用いて、完全に追儼する。

法衣を着用している場合は沈黙のうちに着替える。

普段着に戻り、儀式についての個人的メモ(『魔法日記』用)を終わるまで、この沈黙を続けるのが望ましい。その後は、軽い食事、飲み物等を探り、談笑し、地上に帰還したことを自分自身に印象づけること。

VERBORUM PUBLICA  
I O S  
RITUALE DE  
AEQUINOCTIO VERO

IMPRIMI POTEST: I O S  
NIHIL OBSTAT QUOMINUS IMPRIMATUR  
IMPRIMATUR : M.E.S.A. 5=6  
MARTIUS MCMXCVII

春分儀式

Copyrights(C) All rights reserved I O S 1997  
1997年3月1日 I O S 発行

本文書は、複数のまたは個人の会員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I O S の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンプル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I O S の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。